

ことばの声

坂口立考

夏至の夕暮れ。食卓から窓越しに白く光る三日月が見えた。はっとして庭に出てみると、西の空高く、ちやうど隣家のセコイヤ高木の尖頭をかすめるようにして、膨らみかけた月がくつきりと浮かんでいる。仰ぎ見るうちに、桃色がかったひと筋の雲が流れてきて、針先のような木の先端に差し掛かるかのように見えた。あたりには静寂が戻り、空気もいくぶん涼しくなってきた。微かな風にセコイヤの枝葉が揺れている。その高い柱の中にも平静の時間がやってきた。暑い日中、五十メートルはあるであろう、その樹内は上昇水流で満ちていた。休養の合図とともに、水流はゆつくりと下へむかつて降りてくる。あんなに高いところまでどうやって水もちあげるのか不思議だという話をよく聞く。私はいつも、下から押し上げるのではなく、上から引つ張られてのぼっていくといったほうがよいと思う。てっぺんから呼び声がかかると、根から吸い上げた水の粒が集まり、連なって幹の導管内をのぼっていく。気温が下がると、今度はゆつくり降りてくる。それは自律神経のようでもあり、自らの対話のようでもある。葉の蒸散作用、根の浸透圧、導管内の毛細管現象。それぞれが継ぎ目なく連

動するしくみだといえ、わかったような気にはなるが、あまり実感は湧かず、どこか心もとない。水が自然に連なるのは、水の粒に粘性があり、それが管内で凝集力を発揮して糸のように引っ張られるから。目の前のセコイヤになり代わり、自分の体内で水粒の長い数珠が小さな音を立てて牽引されている様子を思い浮かべてみる。そのひとり芝居こそが、論理に実感を与えてくれる。こどもの頃、よくお風呂のお湯をホースで吸い上げる「サイホンの原理」を実験した。お湯が音を立てずにすうつとあがっていく。生け花を生徒さんに教える母の脇で「水切り」を覚え、これもよく実験したものだ。こちらは水がのぼっていく様子を覗くことはできないが、握るだけで血が吹き出そうな華道ハサミで花の茎を切り取るパチンという強烈な金属音が、吸い上げの合図音になった。日々の観察なしに想像力を養うことはできないが、想像するための工夫なしには観察そのものが続かない。水は糸だという実感を体得するのは、観察と想像の両方によってであり、それを「実演」してはじめて、目に見えない力による現象に一步近づける。

いつも思い出すのは、小学三年の時に書いた一篇の詩。雨が庭の木々を包み込む情景を、私はことばに映しだそうとした。締めくくりに、「雨の音は何の音？」と聞くと、「天からのびた糸の呼び声」とこたえる。この一行を添えたのは私の母である。最後のひとことが詩に劇的な変容をもたらしたことを私は直観的に理解した。雨は水の粒と音の粒でできている！水の粒が糸になり、音の粒も糸になる。母は繰り返して、詩を朗読してくれた。その声は、細雨が土にしみいるようにやさしく、私に呼びかけることばが声になって全身に響いた。促されて、もう一度自分で声に出して読んでみる。すると今度は、自分に尋ねると、その自分にこたえる、もうひとりの自分の声がある。当時の私にはそれを

概念で理解する術はなかったが、声のあることばで自問自答を響かせるという不思議な体験は、私に大きな衝撃をもたらした。

母は私の物心がつく頃から、創作する私をいつも励ましてくれた。「書いてごらん」と勧めては、模範を示してくれた。耳を澄ませて観る。目を凝らして聴く。感覚の交流をつくりだして、自らに問いかける。その姿勢こそが想像のレシピである。自分の心の中に響かせる声のあることばで、より深い想像を繰り返し返す過程に、ひとつの論理も生まれる。パスカルの『パンセ』はその宝箱だと思う。「人間は考える葦である。」水が途絶えたらあつという間に枯れてしまう、ひと茎の葦のように脆い人間は、その弱さを知り、心の中に宇宙を包みこむことができる。その心の働き一点において、人間の尊さがある。ただ考えることができる、のではない。人間は「心の葦」なのだ。ひと茎の葦は私である、という想像の力よって、それを自らに問いかけ、こたえることばの声を生み出すことができる。それが内なる声を聴くことであり、自らの心との対話である。その営みの中に真理に近づく方法がある。心を研ぎ澄ませ、自分に訪れたことばを、今度は自分の声で繰り返し響かせることで、抽出され、凝縮され、それらがつながりをもって組み立てられていく。すべてのことばに声の響きがあるのではない。響きのあることばは、自らの心に配慮する姿勢、その姿勢を平静に保つ習慣の中にこそ生まれる。そのように生きるとはとてもむずかしいと思う。ほぼ半世紀に渡り、母が身をもって私に示してくれたのは、そのような姿勢をつくる努力が持つ、かけがえのない尊さである。

母は私の「パンセ」であった。想像には生命力がある。いつもそれが、自分を信じる力を与えてくれる。奇跡のような、ありがたいことだと思う。しかし、実はとても長い間、私はこの感謝しきれな

いありがたさに対して、心をもっともつと深めることができないうままでいた。いくらそのように感じていても、自分自身の心を響かせる、ことばの声が足らなかつた。何か物足らない感覚がいつも心のどこかにあつた。その理由に気がつき、自分を正しく理解するためには、想像に息吹を与えるいくつものきっかけが必要だつた。ようやくそこへ辿り着いたのは、今年の正月に家族が集まってとりおこなつた姉の七回忌の最中であつた。

六年半前、年が明けて間もなく、姉は肺がんで他界した。食欲がないという体調の不良を訴えて病院で検査をした年の瀬、すでに病魔の進行は末期にあつた。折しも私は、原因不明の身体の痛みを抱えていて、スウェーデンから家族で帰国してすぐに内蔵の精密検査を受けた。過労のストレス以外に異常は見当たらない、という結果だつた。姉の運命と引き換えに私が助けられたような思いにかられた。たばこの煙はおろか、すべてに慎ましい生活をおくっていた姉に肺がんが訪れるという無情。久しぶりの正月、姉と過ごす最後の数時間になつた。生まれたばかりの孫を膝に抱いてほころぶ笑顔。姉は以前にも大病をして生死を何度もさまよい、そこから復帰した生命力の持ち主。聡明で何事にも控えめだが、芯の強いひと茎の葦。最後に交わしたことばは、「ちよつと行つてくるね。すぐに治して出てくるから。」本人には知らされていなかった病状を、きつとどこか感じ取りながらも、姉は希望のことばだけを残していった。だが、衰弱した体にがんの治療は過酷だつた。入院してすぐに意識を失い、命の灯は静かに消えていった。

家族だけのしめやかな葬儀は、僧侶である兄のことばに導かれた。『修証義』を読み上げる自分の声

は拙いが、他に頼れるものはなかった。兄は「月心佳香大姉」と書き入れた姉の位牌を持って法話を始めた。「お姉さんは月の光のようでした。」兄弟の意識が連続しているという安堵感が喪失感に入り交じった。「人はみな、借りを返しながら生きるのです。」その時以来、姉は名実ともに、私の三日月になった。私は毎日を大切に生きることを誓った。スウェーデンに戻り、毎日通勤の車内で『修証義』を聴いた。悲しみが少しずつ和らいでいくうちに、「発願利生」ということばがさざ波のように私の心に迫ってきた。具体的な四つの実践方法がある、という。「布施、愛語、利行、同事。」すなわち、「役に立つもの、やさしいことば、人のためのおこない、わけへだてのない心。」天に浮かぶ三日月の呼び声が聞こえるようになった。「お母さんを大切に。」姉と別れ際に交わした最後のことばではなかったが、それは姉の真実のことばであったから、それが自然に私自身のことばになった。私は、娘を失った母の心中を深く察するようになった。

これが「感謝の気持ちを本当に忘れない」ことの最初のきっかけである。忘れていない状態とは、毎日思い出すことのできる姿勢を保つこと。そのためには、具体的な身体行為を實踐する以外に方法はない。声のあることばで、心を表現すること。ありがとう、ということばで自分の心が震えるようにすること。声の響きのあることばで語り、自分でそのことばを聴き、そして書いて確かめること。私に不足していたのは、自らのことばの声の響きであり、それを具体的な行動として毎日行なうための、直接的な行為であった。私は自分の思いや考えをしっかりと文章にかえて、母に便りを書き続ける決心をした。それまでの日常便りとも、私自身の日記ともちがうもの。私自身の内面に育ったことばに息吹を与え、直接母にお返しすることである。それ以外に、感謝するとか、大切にすると

抽象概念を実現することはできない。姉の死に遭遇して以来、生きることの意味に触れるためには、自らからが生きる「かたち」をつくり、それ自体を生きる必要があるということを、私は時間をかけて学んできたように思う。さらにありがたいことに、母が電子機器の操作を習得してくれたおかげで、メールで多くの書き物や創作物を頻繁に届け、それらについて語りあうことができるようになった。

姉の七回忌は父の二十七回忌でもあった。再び、「発願利生」を読んだ。心の習慣づくりは長い年月を要する。この六年半のあいだに、自分で蒔いた種が育っているという実感と、驚きがあった。振り返ってはじめて、それをはっきりと意識することができるよう。父の遺言「お母さんを大切に。兄弟仲よく」もしっかりとした土壌になっていたことにあらためて気がついた。体で行動する、具体的なことばを声にして、自らの中に醸成する。それを繰り返しているうちに、やがて芽がでて根つき、すこしずつ育つ。自分が育つためには、水をまくように、自分で自分を育てることばをつくり、それが自ら響いてくる環境をつくる。育てるとは、待つということ。待つことが大切にすること。そのように思えるようになった。心の中に「ひとり二役」の舞台を用意して、「育つ自分」から「育てる自分」へ呼びかけ、語りかけ、質問する。次に「育てる自分」が「育つ自分」に向き合い、そのことばの声を聴き、そちらを向いてこたえる。書く行為は、心を開いておくための橋渡しの実践であり、両者のバランスをとって姿勢を継続する営みだと思う。母の「天からのびた糸の呼び声」は、長い歳月をへて、天にむかって呼応する私のことばの声になった。姉の七回忌をきっかけに、家族の思い出の資料を復刻版にして再編集し、家族という「意識の連続体」を再発見する想像の旅をはじめた。それを母とも、兄ともいっしょにつくりあげる喜びを、母が満月にかわる日まで休むことなく紡ぎだしていきたい。